

第41回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

【正賞】

『大熊町立学び舎ゆめの森』

認定こども園と義務教育学校が一体となって誕生した大熊町の震災復興を象徴する教育施設である。学年・クラス編成を超え、0～15歳が共に遊び学ぶという教育理念を建築によって柔軟に支える点が特筆される。中心に配置された開放的な「わくわく本のひろば」を核に、そこから放射状に広がる多様な学習エリアが三角形グリッドの構造と巧みなレベル差によって有機的につながり、大小さまざまなスケールで開放と適度な囲みのバランスが取れた伸びやかな空間を生み出している。ワークショップを通じて利用者と設計者が目標を共有し、これまでにない教育環境を実現した姿勢も高く評価できる。開校当初5名だった児童生徒数が短期間で大幅に増加し、地域に新たな居住を促した事実は、この建築と教育モデルの力を示すものであり、新たなまちづくりの基盤として大きな可能性を拓いた建築と言える。この場で育まれる15年の「夢」の先にどのような未来が描かれるのか、その行方にも期待したい。

【準賞】

『南相馬市民プール』

屋外プールから屋内プールへの建替えに際し、市民ニーズに応える機能性と、周辺環境に調和するデザイン性を共存させた施設である。プール空間は、接合部を最小限に抑えた菱形の張弦梁構造により無柱の大スパンと塩素環境下での耐久性を両立している。この構造の着想は外装のガルバリウム鋼板の菱葺きにも引き継がれ、光を受けて季節や時間帯によって表情が変化し、公園の緑の中にワンボリュームの美しいフォルムを浮かび上がらせている。プール空間と観覧・待合スペース、屋外を大開口で接続することで、利用者が安心できる動線と外部とのつながりが豊かな空間を形成しながら、随所に見られるコーナーの丸みや天井高の調整により無機質になりがちなプール建築に温かみを与え、地域に根差した屋内プールのあり方を示した好例である。

【優秀賞】

『会津柳津駅舎情報発信交流施設』

1927年に建築された木造駅舎を、観光のまちの新たな情報発信拠点として再生した事例である。無人駅となっていた駅舎を町が引き継ぎ、赤べこ張り子工房やカフェ、ショップ、待合室を組み込み、地域コミュニティと観光の核として機能させている点が評価される。改装にあたっては、写真や地域住民へのヒアリング等を通じて建築当時の「地域の記憶に残る駅舎の姿」を丁寧に調査し、杉の下見板張りの外壁や井桁状格子窓、モルタル腰壁等を復元することで、駅の面影を残しつつ新しい居場所を生み出すことに成功している。歴史的建築の継承とまちづくりへの貢献という観点から、地方における駅舎再生のモデルとなる建築である。

『相馬小高神社社務所』

震災と老朽化に伴う建替えにおいて、歴史・文化の継承と宮大工の技術伝承を両立させた建築である。旧絵馬殿跡地に新築され、地表近くの埋蔵文化財保護のため工法の制限があるなかで、大きな軒の出や全開放窓、廊下高さの工夫など、参拝者と神社双方へ配慮した機能的で丁寧な設計が随所に見られる。県産ヒノキ材を用いたカウンターや旧絵馬殿の襖絵修復、玄関戸に配された九曜紋の会津塗仕上げなど、伝統的要素の保存活用にも注力しており、本殿など既存建築との調和の工夫も光る。歴史・文化・技術の継承を示す建築事例として評価された。

『東光寺「客殿」』

寺院が本来持つ地域の居場所としての役割を前面に出し、現代のニーズに応える開かれた建築である。信夫山麓に位置する敷地の10m近い高低差を巧みに利用し、岩盤を掘削して生まれた地階の駐車場兼広場は、マルシェやイベントにも利用できる多目的空間となっている。その上に設けられた木造の客殿は、本堂との調和を図りながら、素材や照明、インテリアに至るまで丁寧に設計され、明るく親しみやすい空間を実現している。多様な使い方を誘発する工夫も魅力的である。登下校する子どもたちが立ち寄る居場所を目指し、地域住民と寺院が共につくり上げた「現代の寺子屋」として、今後の展開が期待される。

【特別部門賞】

『AQRIO（アクリオ）』

工業団地という景観の手がかりが少ない環境の中で、「風景に溶け込む建築」を目指した本計画は、社員食堂という日常的な場に新しい価値をもたらそうとする意欲的な試みである。造成前の原風景を手がかりに森を再生し、アプローチから建物周囲まで連続的な緑の体験をつくり出した点は、工業団地の単調な風景に一石を投じる提案といえる。食堂内部は四面ガラスの開放的な構成とステンレス製軒天への風景の映り込みにより、自然を身近に感じられる心地よい空間を実現している。社員の昼休みを豊かにし、雇用の面でも魅力につながる環境整備として、企業姿勢を体現する建築である。

『松本養蜂総本場 本店 Boutique del miele』

既存住宅を改修した小規模な店舗ながら、施主の強い想いと美意識が随所に込められ、蜂蜜専門店として独自の世界観を確立している。店内は天井高の操作や素材選択によって広さ以上の開放感が演出され、洗練された空間が印象的である。入口正面に配置された白いトンネル状のアプローチは、鏡の反射と相まって来訪者を日常から切り離し、裏庭へと誘う魅力的な体験を生み出している。養蜂文化の発信拠点として、すでに進んでいる周辺整備とともに、今後続くまちづくりへの貢献が評価された。

『林業アカデミーふくしま』

新規林業従事者の人材育成や市町村職員等の森林・林業に関する知識の習得を目的に建設された研修施設である。木造技術の「見える化」をコンセプトに掲げ、研修棟・実習棟ともに多様な樹種の県産材や加工方法を積極的に取り入れている。開放的な学習環境の中で素材の違いを感じながら林業について学ぶことができる点は、県産材の可能性を感じさせるとともに様々な立場の方が利用する学びの場として大きな価値を持つ。林業の未来を支える拠点施設として、今後のカリキュラムや施設運用と連携したさらなる充実が期待される。

【復興賞】

『浅野燃系株式会社双葉事業所フタバスーパーゼロミル・エアーかおる双葉丸』

震災と原発事故により大きな被害を受けた双葉町に、県外企業が積極的に進出し、工場とショールームを一体として整備したプロジェクトである。屋根面に大きく配されたロゴは、「第五のファサード」として復興への強烈なメッセージを放ち、被災地を巡るホープツーリズムの拠点としての役割を担っている。内部は商品の展示販売やカフェ、工場見学などの体験が丁寧に構成され、中庭では演奏会を開催するなど、施設そのものを「復興を語る装置」として訪れる人に親しみと学びを提供している。地域への貢献と新たな交流人口の創出をめざす意欲的な取組に今後も期待したい。

『haccoba 浪江醸造所』

東日本大震災時に建設された木造仮設住宅を移築・再利用し、新たな拠点として再生した日本酒の醸造所である。仮設住宅の外壁材や住棟表示を生かした設えは、避難当時の記憶を継承しつつ、地域に新しい産業と働く場を生み出そうとする強い意思を感じさせる。既存の陶芸アトリエと直行配置された建築は、工夫された屋根形状により一体感があり、小規模ながら将来の事業展開が期待できる余白を有している。移住者が被災地で挑む「クラフトサケ」が若者を呼び込む地域活性化の形は復興の新たなフェーズの訪れを感じさせる。

『双葉町役場』

10年以上の全町避難の後、いち早く町内で行政機能を再開した象徴的な建築である。設計から竣工まで1年3か月というスピードが求められる条件下で、軽量鉄骨によるプレハブ工法のメリットを活かし、隣接する駅と一体となった「町の顔」としての役割を形にしている。駅に向かって配置された広場は町民が滞在できる居場所をつくり出すとともに、外壁に配した木製ルーバーは、木質化による親しみやすさを生み、駅前に温かい表情を与えている。役場閉庁時でも町民が利用できる計画や、使い方の変化に柔軟に応じる仕掛けも評価された。

(※優秀賞、特別部門賞、復興賞については五十音順。)